

都内への供給拠点

150 Nの大臣認定を申請

東京エスオーシー
芝浦工場

首都圏における住友需要が激減していることとあり、芝浦工場の出荷数量も大きく影響を受けている。2000年度は20万6千㎡を出荷し、09年度は21万3千㎡の出荷を予定している。最盛期に比べ20%以上落ちているが、伊藤工場長によると実際の落ち幅はもっと激しい。「なぜなら、近年の出荷には07年10月いっぱい閉鎖された業平橋工場のシェアが含まれているため、これを除いて純粋に芝浦工場だけで力



芝浦工場

「高強度については2000年から本格的な実験を実施しており、実績を積み重ねてきた。JISレベルの高強度はもろろん100Nを



伊藤工場長

ウントすると約15万㎡で、ピーク時に比べれば半減近くの大ダメージになる。現時点での需要の官民比率は15対85。もともと民需が圧倒的に多い場所柄のため、特に最近では厳しい環境が続いている。

一方、場所柄、高強度コンクリートの需要は多く、工場単独で大臣認定を取得するとともに22のセネコンとも共同で大臣認定を取得している。

「高強度については2000年から本格的な実験を実施しており、実績を積み重ねてきた。JISレベルの高強度はもろろん100Nを

超える超高強度コンクリートも多く出荷してきた」（伊藤工場長）。05年には高層ビルの柱として135N/mm²を400㎡程、出荷している。このクラスの強度になるとビーライト系セメントをベースにシリカヒュームを使用するケースが多いが、当社は粉体のシリカヒュームを単体で受入れ、専用タンクでスラリーにしてミキサーに投入する独自の方法を採用している。シリカヒュームを粉体で用いるよりスラリー化する

ことにより、分散性能が向上し、練混ぜ時間を短縮できるメリットがある。（伊藤工場長、以下同）。

超高強度コンクリートは供試体による強度管理でも留意が必要だ。水結合材比20%以下という結合材量になると構造体コンクリートに新たなビーライ

トの水和熱を供試体では担保できず、JISコン同様の強度管理が難しい。しかし、同社は標準養生を行った供試体でも構造体コンクリート強度と同等の強度を安定して得るため、従来の低熱系セメントに新たなビーライ

GPSで輸送を合理化

同社は輸送の合理化にも早くから着手している。GPSを用いた車両の動態管理システムを導入した。現在、芝浦工場には自家用29台、外注12台の合計41台が常備されているが、面でも有利な低床型ミキ

ジョニアップ化を図った新たなGPSを用いた車両の動態管理システムを導入した。現在、芝浦工場には自家用29台、外注12台の合計41台が常備されているが、面でも有利な低床型ミキ

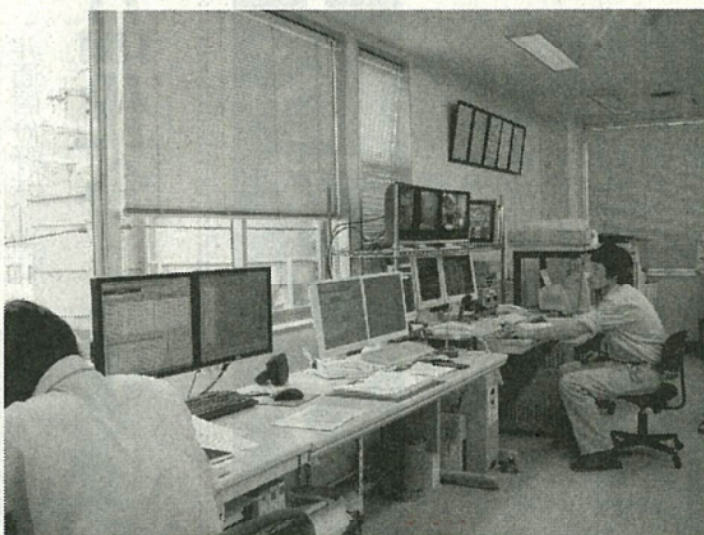
事務所内ですべてがコントロールされている。車両の稼働率は90%を超えており、固定費の削減に大変寄与している。また、コスト面でも有利な低床型ミキ

ト系セメントを加えるなどの工夫をして、JISコン同様の養生方法でも現場で強度管理ができる製品を開発して、150N/mm²までの大臣認定取得を目的とした申請を現在、セネコンと共同で行っている。

各機器の連動により、すでに高度な出荷管理体制を構築。今後は品質情報をもっと活用して、リアルタイムでの品質管理データの提供を目指していく。

改正生コンJISによる計量印字記録への対応は「単位量を動荷重から逆算するソフトを入れればすぐに対応できる」状態だ。「これまで蓄積してきた技術や情報をもっと活用すれば、今のJIS以上のトレーサビリティができる可能性もある。生コンプラントが製品のトレーサビリティを確立することは、セネコンにとっても施主に対してのセールスポイントになりえるため、非常に有効であると思う」。

臨海の工場地帯に位置するが、周辺環境への配慮や美観向上のために工場の緑化を鋭意進めている。花壇やプランター、植樹などで7500㎡ある敷地のうち08年度は140㎡を緑化。今年度は280㎡を緑化する予定だ。



高強度、超高強度の出荷実績が豊富だ



低床車も逐次導入していく

た修正配合の選択が可能であるという。さらにセンサーは骨材及びセメントサイロや混和剤タンクにも取り付けられており、モニター上で材料の在庫管理ができる。

計量操作盤と出荷管理装置をはじめとする